

北海道の幼児画の色彩傾向

千葉 昭正
(静修短期大学)

1. 目的

本研究は北海道全域を調査対象地域とし、道内の幼児の描く絵から色彩面を取り出し、その傾向から色彩における特徴を見出そうとするものである。

本回の報告にあたっては画面上から採取される色彩をもとに、数的に得られる色相の種類に限定し考察を加えたものである。

ここで予測される条件として、

- (1)、年齢をすすめるにつれ用いる色数を増やすとしたらその数値を求めることができるのではないかと、また男子、女子の用いる色数に差があるのではないかと。
 - (2)、各年齢毎、また男子、女子の用いる色彩に一定範囲の色彩群があるのではないかと。
 - (3)、調査地域を内陸、海浜地区に分け比較する場合、青系統を中心に差がでるのではないかと
- 以上の3項目を中心に考察した。

2. 方法

調査地域は12市庁、19市町村、21施設(保育所、幼稚園)を抽出した。調査対象年齢は4才児から6才児に至る層である。第1表に年齢、男女別数を示した。調査用画用紙はB3判とシテーマは「自由画」である。

尚、画面上からの色彩採取にあたっては視感測定とし、市販されているペンテルクレヨン25色セットをサンプルスケールとしてそのクレヨン名を使用した。

分析方法および考察は採取された色の種類と数を基礎資料に、年齢別、男女別、使用頻度別各々の条件で集計を行った。また色彩の使用傾向、範囲を明らかにするため用いられた色同志の相関を取り、相関係数をもとにクラスター分析を試みた。

尚、本回の報告では着色された描写対象物、および色面積については触れていない。

(第1表)

市庁	市町村	幼児数		年齢、男女別						計
		男	女	4才	5才	6才	4才	5才	6才	
12	19	286	258	58	68	162	30	70	55	544

3. 結果と考察

(1) 用いられた色の数について。

教育現場に立つ者にとって、幼児の描画活動中に観察される女子の使う色彩が男子に比較し、多種にわたることが経験的に知られている。道内各地域の4才～6才児の使用色数と男女間の差異についてみる。それぞれの条件で用いられた色の使用度数は正規分布する。4才児の最少使用色数1色、最多使用色数14色、5才児の場合にはそれぞれ1色と16色、6才児では4色と14色となる。

第2表は4才児～6才児の年齢別、男女別の色彩使用度数の平均、標準偏差、分散である。年齢を増やすにつれて確実に色彩種類の数を増加させて行くことがわかる。4才児平均6.4色、5才児7.9色、6才児9.3色であり、年齢差1才につき約1.44色の差がでる。

男女比較での差を見ると、各年齢層ともに女子の使用する色の数が多くなっている。4才児では約1色、5才児2.2色、6才児の差は6才児においても持続し2.5色の差になる。

分散度でみると、男子に比較し女子は4才、5才においてバラつきが男子をうめまわる。しかし第1図にあるように相対的散布度でみると、各年齢とも女子の中心的傾向が強いことを把握できる。

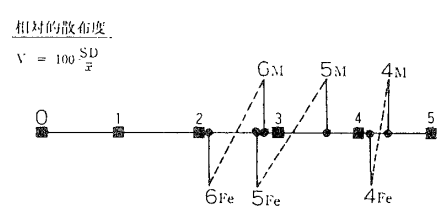
特に女子5才児については、6才児男子をうめまわる色使いをみせる。

(第2表)

年齢・男女別色彩使用の平均・偏差・分散

年齢	男・女	$\bar{x}$	SD	S^2
4	M	5.8852	2.5761	6.5278
	Fe	6.9436	2.8479	7.9968
5	M	6.7345	2.4616	6.0221
	Fe	8.9767	2.5783	6.5963
6	M	8.0714	2.3239	5.3234
	Fe	10.5322	2.1249	4.4425

(第1図)



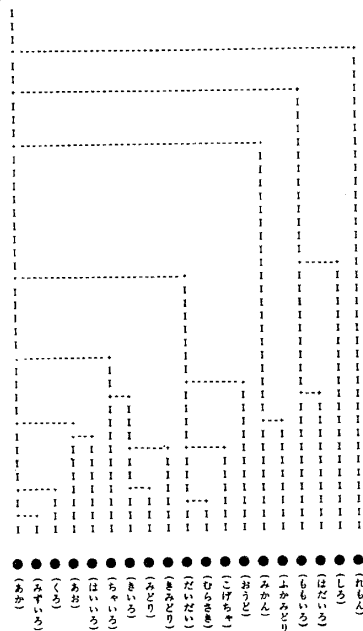
(2). 年齢別、男女別クラスターについて。

それぞれの年齢毎、また全対象児の男女別にそれぞれの特徴を表わす一定の色彩範囲が仮定できるのではないかとこの観念でクラスター分析を行った。使用される色彩の距離の近いもの同士まとまってクラスターを形成することを仮定した。(各条件でのクラスター図は省略した。)

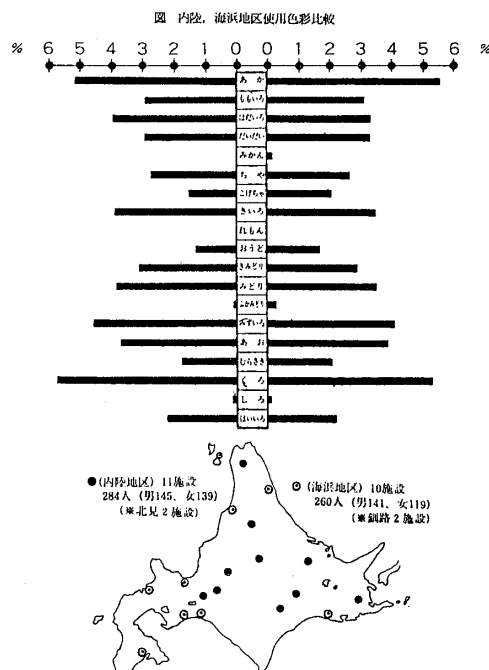
この結果抽出される色彩群は、

- ・ 4才児 色彩群(Ⅰ)「赤」「黒」「水」「肌色」「桃」
色彩群(Ⅱ)「茶」「黄緑」「緑」「青」「黄」「灰」
(※Ⅲ、Ⅳについては省略)
- ・ 5才児 色彩群(Ⅰ)「赤」「水」「灰」「焦茶」「黄」「緑」「青」
色彩群(Ⅱ)「黄土」「紫」「みかん」「深緑」
色彩群(Ⅲ)「桃」「橙」「肌色」「黒」「茶」「白」
- ・ 6才児 色彩群(Ⅰ)「赤」「水」「黄」「橙」「青」「焦茶」「黄緑」「黄土」「緑」「紫」「茶」「黒」「灰」
色彩群(Ⅱ)「れもん」「白」「桃」「肌色」「深緑」
- ・ 男 子 色彩群(Ⅰ)「赤」「水」「青」「黒」「灰」
色彩群(Ⅱ)「黄土」「橙」「紫」「焦茶」「黄」「緑」
色彩群(Ⅲ)「肌色」「桃」「黄緑」「茶」「白」
(Ⅳについては省略)
- ・ 女 子 色彩群(Ⅰ)「赤」「桃」「水」「黒」「肌色」
色彩群(Ⅱ)「茶」「緑」「黄」「黄緑」「青」「灰」
(Ⅲ、Ⅳについては省略)

(第2図) 全対象児のクラスター



4才～6才は加速的な発達を示す年齢段階であり、発達すべき基本的な素地を完成させて行く時期でもある。観察力、行動力の旺盛さ、好き嫌い、男の子、女の子としての性差等、概念色、固有色の色彩獲得のやも広げるものと思われる。



(3). 内陸地域、海浜地域の色彩比較

調査地域を第3図のように区分し(海浜地域は港を有している、もしくは海を遠望できる条件とした。)各色を比較してみた。使用する教則的な傾向としてはほとんど差がなく、同じような用いられ方を推測できる。自然環境からの影響(特に海)を予測、青系統に差があるとする条件は成立しなかった。

4. まとめ

4才～6才児の色彩使用傾向を年齢、男女差でみてきた。まとめられる点として、

- (1) 男子は各年齢毎確実に色彩の種類を1色づつ増加させ、女子は男子に比較し1～2.5色多く用い、また個人差が大ではあるが5才児から飛躍的な色彩獲得を見せる。
- (2) 年齢毎、男女毎常に使用される色彩グループが抽出された。
- (3) 内陸、海浜地域の色彩傾向を求めたが特に顕著なる差は見出せなかった。

(参考文献)

- 1) 鬼丸吉弘(著). 児童画のロゴス 昭和56年.
- 2) M・D・ヴァーノン(著) 知覚の心理学 昭和52年.
- 3) ウーソワ(編) 幼児期の感覚教育 昭和51年.